

「たとえば」、「まあ言ってみれば」くらいの意味、'fortnight' は「二週間」で語源は 'fourteen nights' でしょう。それから 'ruin' は「廃墟」という名詞としての意味を知っていれば、ここで使われているような動詞としての意味も文脈から推測出来るでしょう。

オーウェルがこのコラムを書いたのは第二次世界大戦後間もない頃であり、当時は紅茶の葉ももちろん配給制だった。したがってそこに述べられている紅茶道もまた、限られた貴重な茶葉からいかに濃い美味しい紅茶を出すか、という一点にその主な関心が集中しているのである。なお、このコラムはペンギンのペーパーバック *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell* の第3巻に収録されている。岩波文庫が平凡社ライブラリーのいずれかに邦訳があったと思う。

たばこ屋店主たちのストライキ フランスの喫煙事情

経営学部
田川 光照

前号と前々号の「海外最新事情」の欄で、フランスの学校教員たちのストライキを紹介した。フランスでは学校関係をはじめ交通関係などあらゆる職種のストライキやデモがしょっちゅうと言ってよいほどあり、珍しいものではない。しかし、2003年10月20日に、前代未聞、史上初と言われるストライキがあった。それはたばこ屋店主たちのストライキである。

ことの発端は、2003年1月にたばこの価格が8

%ないし16%値上げされたが、10月20日にさらに20%値上げされた上で、2004年1月にも20%の値上げが予定されていることにある。この値上げは、たばこ税の引き上げに連動したものであるが、この増税の中心的な目的は癌対策にある。

フランスでは1年間に15万人が癌で死んでいるがそのうち3万人が肺癌によるものであり、この3万人という数は交通事故による死者の4倍に当たるといえる。1999年にとられた統計によると、とくに男性の癌（肺癌だけではなく、すべての癌）による死亡率はEU諸国の中でも最高に位置し、スウェーデンを50%、ドイツとイギリスを20%上回っている。他方、女性の癌による死亡率はEU平均を10%下回っており、男性に比べればはるかにましな状況にある。とはいえ、1960年代以降女性の喫煙者が増え続けており、女性の肺癌による死亡率が1994年から1999年の間に40%増加しているという現実があるので、楽観視することは出来ない。こうしたことを背景に、フランス政府は向こう5年間で現在1400万人いる喫煙者を大幅に減少させる目標を2003年3月に立てたのである。具体的には未成年の喫煙者（17歳から19歳までの層の40%が喫煙している：ただし、違法ではない）を30%、成人の喫煙者（36%が喫煙している）を20%それぞれ減らそうというのである。矢継ぎ早なたばこ税の引き上げ、それにともなうたばこの値段の高騰はその一環としてある。

しかし、たばこ屋店主からすれば、この値上がりによって収入が減ることは確実である。これまでフランスでは3万4000人のたばこ屋店主が年間145億5000万ユーロ（10月21日のレート、1ユーロ=129.21円で計算 以下同じ）すると1兆8735億円）を売り上げ、12万人の従業員を雇い、1日に1100万人の客を相手にしていた。しかし、1月の値上げ以降たばこの販売量がすでに9%落ち込んでいると、たばこ屋の団体が指摘している。そのうえ、10月20日、さらに2004年1月に値上がりすれば、たばこ屋店主たちにとって死活問題となる。

ところで、たばこ屋店主たちが恐れているのは、

単に喫煙者が減って売り上げが少なくなるということだけではない。次の数字を見ていただきたい。1月の値上げ以降、フランス全体では売上高が2%減、客数が5%ないし10%減であるのに対し、国境に接する諸県では売上高が10%ないし20%減、客数が25%減となっているのである。これは顧客の国外流出を意味している。つまり国外にたばこを買いに出るのである。すでに、国境近くの地域では喫煙者の11%が1週間に最低1回は国外でたばこを入手しているという。この傾向がさらなる値上げによって加速することは目に見えている。ちなみに、10月20日の値上がりによって、フランスのたばこの値段は1箱平均4.60ユーロ（594円）となる。この時点でのヨーロッパ諸国のたばこ1箱の平均価格は次の通りである（高い順に）。

イギリス：6.70ユーロ（4.70ポンド、866円）
アイルランド：5.90ユーロ（762円）
スウェーデン：4.35ユーロ（39.50クローネ、563円）
ベルギー：3.70ユーロ（478円）
スイス：3.30ユーロ（5.10スイスフラン、426円）
ドイツ：3.20ユーロ（413円）
イタリア：3ユーロ（388円）
ルクセンブルク：2.85ユーロ（368円）
ギリシア：2.70ユーロ（349円）
スペイン：1.85ユーロ（239円）

イギリスとアイルランド以外の国はすべてフランスよりも安いことになり、しかも、ベルギー、スイス、ドイツ、イタリア、ルクセンブルク、スペインはフランスと地続きで国境を接している。とりわけイタリア、ルクセンブルク、スペインのたばこは安く、国境まで車で1～2時間の所に住んでいる住民なら当然国外に買いに行くであろうし、それら安い国のたばこの密売がフランスで横行する恐れもあるのである。

フランス政府もたばこの値上げがたばこ屋に打撃を与えることは十分に分かっている。そこで、10月20日の値上げの1週間ほど前に、たばこ屋店主たちに補助金を出すことを発表している。総額は1億3000万ユーロ（168億円）で、その支給方法は次の通りである。売上高が年間15万2000ユーロ

（1964万円）以下のたばこ屋については手数料を現行6%から8%へ引き上げ、売上高が15万2000ユーロから30万ユーロ（3876万円）までのたばこ屋については同じく6%から6.7%に引き上げる。また、2003年度の売上高が2002年度比で5%以上の減があったたばこ屋にも補助金を出す、というものである。

しかし、たばこ屋店主たちはこれでは不十分であるとして、10月20日、全国3万4000人の90%がストライキに入ったのである。店を閉め、全国80ヶ所以上で集会・デモが行われた。この史上初のストライキに対する国民一般の評価はといえば、あまりかんばしいものではない。インターネット上で行われたある調査によると、10月22日現在でたばこ屋店主たちの運動を支持する人は28%にすぎず、支持しない人の57%を大きく下回っている。また、公衆の健康のための値上げを支持するという人が50%、支持しないという人が29%となっているのである。

付記：この文章は、主としてAP、AFP、Reutersなどの通信社が2003年10月20日前後に配信した記事を土台にしたものである。